

エネルギー需給分析には定量的な分析が可能な分析モデルを用いることが一般的である。システム工学や計量経済学等の考え方を元に構築されたモデルは、エネルギーの需要と供給の分析を可能とし、将来のエネルギー需給予測、CO<sub>2</sub> 排出量予測や経済影響に関する分析を可能とするものである。分析モデルはアプローチによってボトムアップ型、トップダウン型もしくは最適化型、一般均衡型等に分類されることがある。また、モデルのコンセプトとしてあるべき将来を描くバックキャスト型、現在の延長で未来を考えるフォアークキャスト型等があり、特徴に応じてモデルタイプが整理されている。私はこれらのモデルの分析思想・アプローチ思想の背景には道徳・哲学に関する思想があるのではないかと考えている。論理の飛躍、誤解、こじつけを承知の上で、マイケル・サンデル氏の著書<sup>1</sup>を参考にエネルギー需給分析モデルと道徳・哲学的な思想とを対応付けてみたい。

#### ・ 最適化型 ⇔ 功利主義

最適化型の分析モデルは全ての人の効用の合計を最大化する（もしくは負担を最小化する）という視点から分析を行なう。この背景には、あらゆる価値が一つの基準に換算されるものであり、個々人を見ると不公平感があつたとしても全体として効用が最大化するものであれば良いという功利主義的な思想があると考えられる。

#### ・ 一般均衡型 ⇔ リバタリアニズム（自由至上主義）

一般均衡型の分析モデルは全ての参加者が個々人において自由に活動することで非効率性が是正され、望ましい均衡状態に収束していくという視点から分析を行なう。この背景には、全ての参加者が自由に行動することが個々人にとって望ましいものであり、社会全体にとっても望ましいものであるというリバタリアニズム的な思想があると考えられる。

#### ・ バックキャスト型 ⇔ 目的論

バックキャスト型の分析モデルは将来のあるべき姿を目標として、そこに至るにはどうすれば良いかという視点から分析を行なう。この背景には、そもそもエネルギー需給分析モデルは将来の持続可能な世界を描くものであるという目的論的な思想があると考えられる。

#### ・ フォアークキャスト型 ⇔ 道徳的個人主義

フォアークキャスト型の分析モデルは過去のトレンドや現在の状況から考えて将来の姿を描く分析を行なう。この背景には、将来は現在の個々人の選択に委ねられているものであり、現世代は前世代に対しても将来世代に対しても道徳的な束縛に縛られるものでないという道徳的個人主義的な思想があると考えられる。

<sup>1</sup> 本稿ではハーバード大学でのマイケル・サンデル氏の「政治哲学」の講義を書籍にまとめた『これからの「正義」の話しよう：いまを生き延びるための哲学』（鬼澤忍訳）を参照した。テレビ番組の『ハーバード白熱教室』は同講義を収録して制作されたものである。

分析モデルと道徳・哲学的な思想について仮に上記のような整理ができるならば、我々は分析モデルを選択した時点で既に価値基準や道徳的な考え方についてある種の判断を下しているとも言える。サンデル氏は著書や講義の中で日常の例を引用し、古今の哲学者の思想に照らして議論を行なっているが、モデル分析についても同様に多様な視点で考えるべきなのかもしれない。

さて、肝心のサンデル氏自身の思想であるが、同氏はコミュニタリアニズム（共同体主義）の代表的論者であると言われている。コミュニタリアニズムは「正義」は共通善に基づいて判断されるべきであるという主張であり、同氏は道徳に関して積極的な市民生活を奨励している。多様な価値観が存在する現在においては、エネルギー需給分析に関しても数多の価値観を十分に議論し、考慮していくためには従来型の功利主義的なアプローチや自由主義なアプローチだけでなく新たな考え方を検討していく必要があるのかもしれない。

以 上

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)